



風月帖

吐月撰

寶曆二

154

卯のむら〜や〜晴み柔お嬌〜き  
ら若ん乃 蘇柳雪巾 唇之縁 遠く旅寐  
思ひま〜折〜吐月 眠我の 妻子まの  
やう〜芝浦と 傳ひやはら〜して  
首塗〜成〜るかの海晏 福林〜杖と  
こめら〜きて 帆乃〜素阿り〜に元あ次  
附向の 纏〜提きと 扉ふ 教き、  
以信は統

之れは最期と雖も歸て予の生るるを此  
 う一日汚ひ其の例の二三子と共く  
 死を待てたるの吟ありぬ其の  
 風之帖乃獨り清く梅よりく  
 無きを寫稿おとよ風麻乃田中する  
 中村述

辛巳仲夏



歌仙

つみ楓 喜まよもほのむらみか  
 甘あくのちり 櫻を 襷の 提を  
 弦引く 懐のちの 試を  
 さけく 唐とえ 張はし  
 夕暮 成る ちて 定乃 月吟  
 嶺より 及びぬ けの 秋の 秋  
 夢々太  
 吐月  
 花吹  
 遠平  
 眠我



春風又入も涼とえよの涼り多  
 眠江  
 春風も本と皆あつて石の涼り多  
 枕流  
 うりしと恋してを介理る  
 五全  
 梅常になまぬ 巫女乃古きつ孫  
 棧石  
 なり此ぬるるのりも花を川之  
 氣腹  
 今年もく和流く月の欠乃り  
 南花  
 解所と涼きせぬ印乃羽起  
 中

宿札もあつても風の信はき  
 後  
 ちと涼所る花もたつて  
 科  
 之後楽しき花もたつて  
 我  
 いつ 砲貝くちをさぬん  
 石  
 帷の涼り地元の涼り多  
 月  
 あもむしやきく乳母のいさ  
 平  
 蓮の香も一向宗乃寺ぬる  
 江  
 雨くちをさぬん涼り多  
 露

つらつらとやす懐柔此維新編  
主とぼくつ志のからむ家  
文と取乃弱とあ格もさるる  
財布もさせて薄田又ハ  
物々々と何湯の待て事終  
改平ノ端乃あ——教る  
月の表まで跡更車みら  
りしものと旅女箱中るり

明 後 江 全 院 中 秋 明

肩の解の助を(あ)と推してハ  
舟をゆつれのりかたなり  
名のとと名のと山も友馬  
生るる乃り唐のけはる  
を乃ゆつと結て見のたひり  
実るはら——ふ暖みれあ

執 筆 平 全 石 院 後

春之部

千個千漁村霞夕日外 柳肘  
菜花も乃くや言瀬の水到掉 金沙

うらみすや百戸の月日早 吏流

あゝ魚や名も流日柄すみそ川 吏鏡  
嗚よりと花もも梅やゆさくら 葵把

あゝちよもあと思り帰る 整水

柴刈の日れ解り石と巖の音 吏仙  
出りりや詠ぬと十去哥仙 吐月

うつらきとれ二名あやふゆ蝶 物雲  
角屋そふ心と起よきま麻 遠平

強倉と古所所幾つ八まきら 信夫  
やう満う啼て淋き蛙の音 自来

まの合て香紙ゆりおまや梅を  
夕暮をよみしそりお梅くふ  
五梅や隣子う移まれば下  
雪回  
眉山  
六波

ひとあふるを庭ぬをればは  
花や古窓はく庭乃先  
後小氷山よりおりと帰る  
よももちやき印しりよ梅帯  
如雷  
鬼守  
布昂  
眠我

咲こころは涙を梅乃啼くふ  
おささくや鏡の中さるる  
葉れもや清所へを控ははる  
山さきやふりて凍ふ水の音  
出うりやふ家目こたれを眠る  
おうりや梅あまのふれ山立系  
福とん会や押合し神は儒仏  
宜中  
野菊  
花明  
都雁  
五全  
眠江  
山奴  
萬古



甲月や今もも蟹の戸はさる  
 縁とも又も葉なりり花つとも  
 長葉さやうも扇して山桜  
 陽さす 時きぬあのを衣なり  
 肩の月も境を柳の  
 五人杖持款の代りさう那  
 牛車 史記 氣後 枝直 樞鏡

葉波うも雲を鳴を蛙の南  
 梅の香うはらぬ井水秋風ふり  
 きのうら一きか敷て梅系  
 枯も経済きや 糸も人係  
 湖とさうもく口をう鏡の那  
 花の月も一鏡の那  
 壁くやをさる人の差ひら  
 友路 白翅 踏丸 芦一 百碩 棧石 柳波

梅の香はぬき川澄ら柳の影  
 青い山の空へ志こ入る鹿の子女 如凡  
 むつし心なきははそし梅の影  
 葉れをくせのきもありえ給こそ  
 千金の想をあざく藤の垣外 橋青  
 離れてくせきやふ川へくさる外 野半

夏之部

編みきやうやせの巾 古阿婆 柳肘

千人をたぐりきひとひとくわゆる 金沙

昔は清くあり女むまひと海はかり 吏流  
 山降乃裾巾の啼や辻り毒 吏鏡  
 ひとく嘆き子とあひ出給も久 菘把  
 ちりき守啼ぬるを花あけ給路 楚水  
 中干や繪も異なりく六哥仙 吏仙

揚々ハ新々そよぐれ夏の月  
吐月  
その具履の裏中〜や昔簾  
物雲  
布子〜襪一糸や麦乃秋  
這平  
市中之類乃比叡や雲の峯  
信夫  
胡蝶を〜して赤やかぶつとこ  
自来

旅人のち〜り軒より汗拭ひ  
雪岳  
言此衣乃反古〜とけく昔作  
眉山

ゆ〜水乃都〜病〜さ〜外  
六渡

又字とま〜〜（赤）陳教を  
如雷  
初〜古古〜とあ〜かぶつとこ  
鬼守  
お花〜川後〜と〜杜〜外  
南花  
下衣〜あ〜と〜人〜及〜と〜川茄子  
眠秋  
夏〜〜〜中〜の〜明〜水〜鶴〜外  
亘中  
正西〜〜〜と〜と〜白〜よ〜田〜林〜外  
女  
野菊

柏うとと袋角あ梨名机  
 花明  
 登形やあふ借ぬ叶あう  
 都雅  
 破るゝと鬼の差居れ清水計  
 五全  
 三日月乃初計えり初能  
 眠江  
 登る海や田うへの飯と送かり  
 山奴  
 寺も復を限り一郭公  
 萬古  
 寺ひる川流る建るの夏外  
 極鏡

茅門力途り入て牡舟外  
 枝頁  
 うき叶の根をたう何く五月雨  
 鼠股  
 去る雲れ影を 翁て清水外  
 史報  
 押さやとの縫例とてて君  
 飛巻  
 後士へ用あり字とておわすれ  
 牛東  
 涼一さや夕香うけて扇橋  
 友崎  
 月代うゝ歳乃うゝさや時を  
 白翅

りともりくくわひほくまお物  
よし女こ布子あせそりみ月雨  
芦一

十日く雨のち柳乃をくん井  
る所く山ん付く架夏さく  
志く雲れよめくわく柳卯月井  
瘡瘡神乃出子まあくく過くを  
あ乃岸もありてんくふ是事井  
女  
仙衣 如風 柳波 棧石 雨磧

夕暮をあめ雨やかんこも  
忌休や日くくんき風の教  
くま月のまや富士り夜久  
み月るや雲くく付ぬ夕馬  
三粒ても念のま代し糸う雨  
楓村

楓之  
新柯  
橋青  
観世

昭和十四年二月寫  
原本未見燕之氏寫本三言

俊定菴



